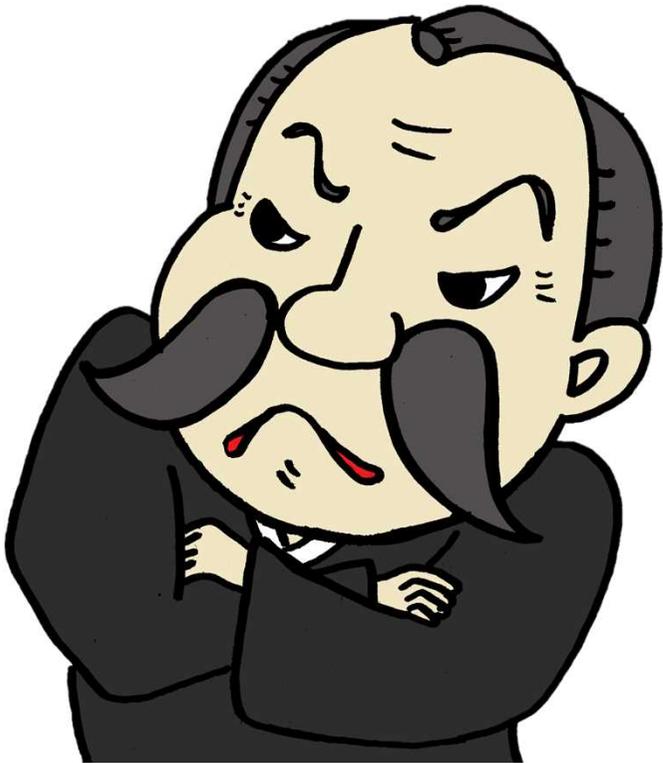


つがるの昔っこ30 (昔話)

律軽のひげ殿様②

(標準語)



国土交通省 東北地方整備局
岩木川ダム統合管理事務所
イラスト：やざわ ゆな
カラーリング：みやかわ みなみ

津軽のひげ殿様は、お江戸で暮らしていました。
ある日、将軍様の御前で馬術大会が開かれました。

この時、将軍様のお抱えの某（なにがし）の蔵人（くらんど）という人が居ました。この人は乗馬の名人で、青竹乗りという、それはそれは皆がびっくりするような芸を披露しました。それは、池のこちらの岸から中の島まで青竹を2本渡して、その上を馬に乗って歩いて、中の島でまわれ右をして、また戻ってくるという芸でした。
それを見た大名や家来たちは「あら〜」「わあ〜」と言って、皆感心しました。

ところが、ひげ殿様だけは面白くないような顔をして「フフン」と笑いました。
それが将軍様のしゃくに触って
「津軽公、如何（いかが）致した」
と聞きました。



意地っ張り殿様の悪い癖がまた出てきて、

「私の家来には、一本の竹の上を馬で渡って、途中でくるっと向きを変えて引き返してくることが出来る、乗馬の名人がおります」

とホウを吹きました。



将軍様はそれを聞いて、腹が立ってきて

「よし、それならば、その家来を江戸に呼べ。余の面前で馬の曲乗りをさせてみよ。

今から五十日の期限を与える。

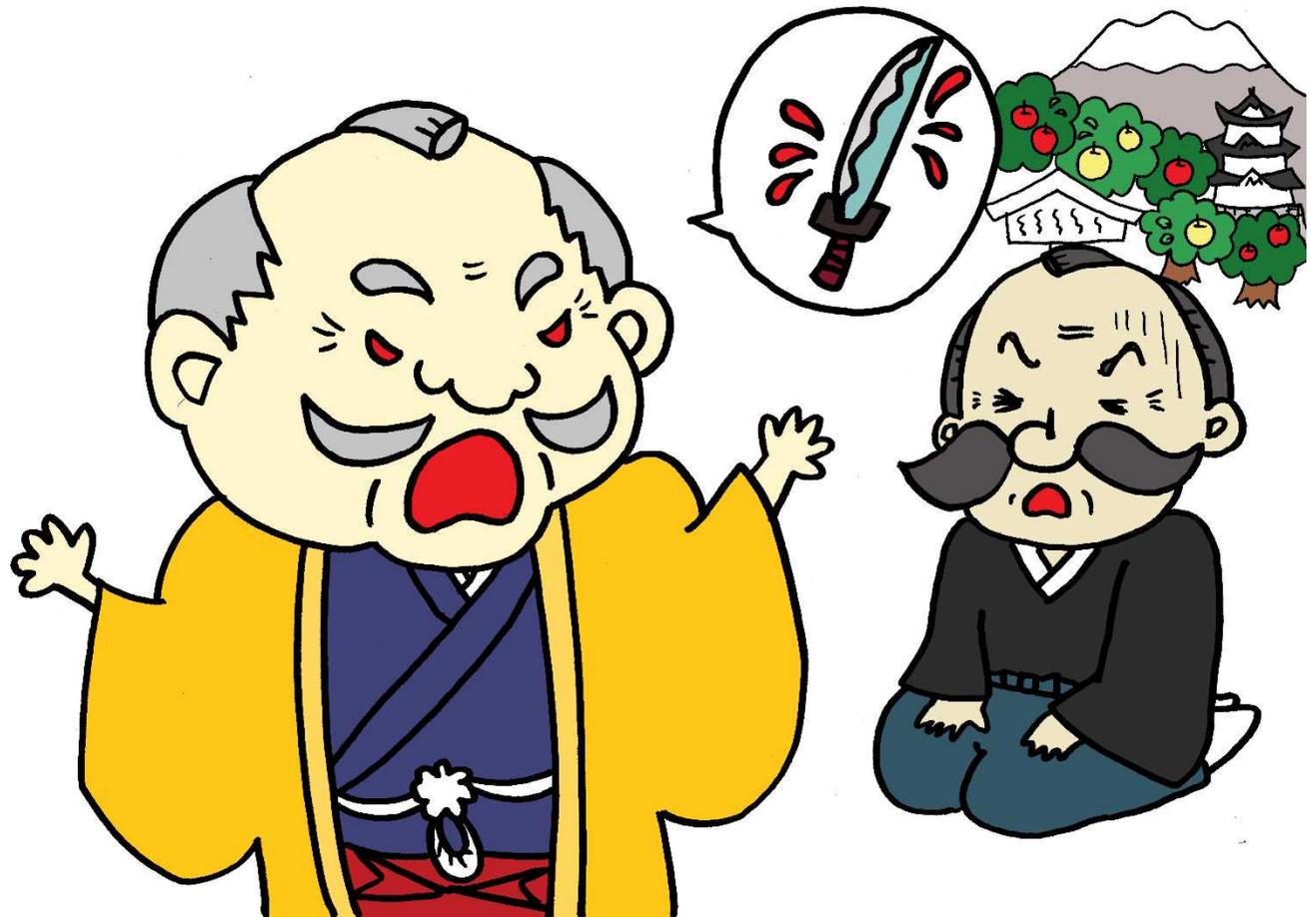
もし、それが出来なければ、そちに切腹を言い渡す」と厳しく命じました。

津軽公は「これは言い過ぎた」と思いましたが、取り返しがつかない。

早馬を飛ばさせて、乗馬の名人を連れてこいと言いました。

さあ、津軽藩ではこの話を聞いて大騒ぎになりました。

国中におふれを出して、馬の名人を探しましたが、青竹を渡れるような馬乗りなど居るわけがありません。

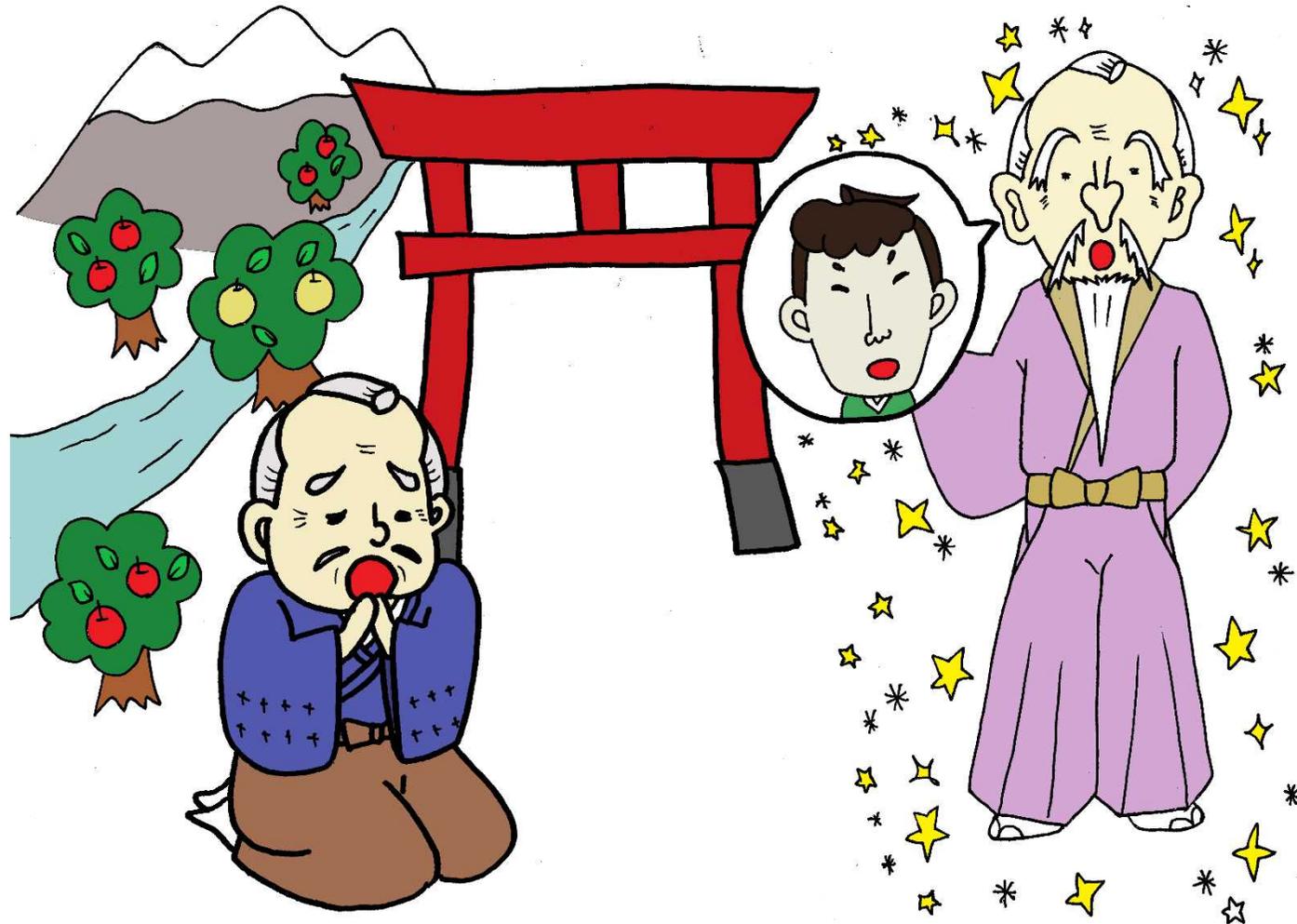


ご家老も真っ青になって、またしてもどうしようもできなくなって、赤倉様へお願いに行きました。

『赤倉様、赤倉様。何卒、何卒、津軽をお救いください』
と必死に頼みました。

三、七、二十一日の満願の日、白いひげをはやした赤倉様があらわれて

『右馬介（うまのすけ）を江戸へ行かせろ。あとはわしが助けてやる』と言い、スッと消えました。



ご家老は右馬介という家来を知らなかったので探させると、連れてこられた男は、ぼんやりとした、背丈がとても低くて、身分の低い侍でした。
ご家老は『右馬介、お前は馬に乗るのは得意か?』と聞くと、『私は馬に乗ったことはありません』と答えました。

何かの間違いかもしれないと思い、さらに探させましたが、家中に右馬介という名前の者は他にいませんでした。

みんなは不安に思いましたが、赤倉様のお告げなので、この侍を江戸に向かわせました。

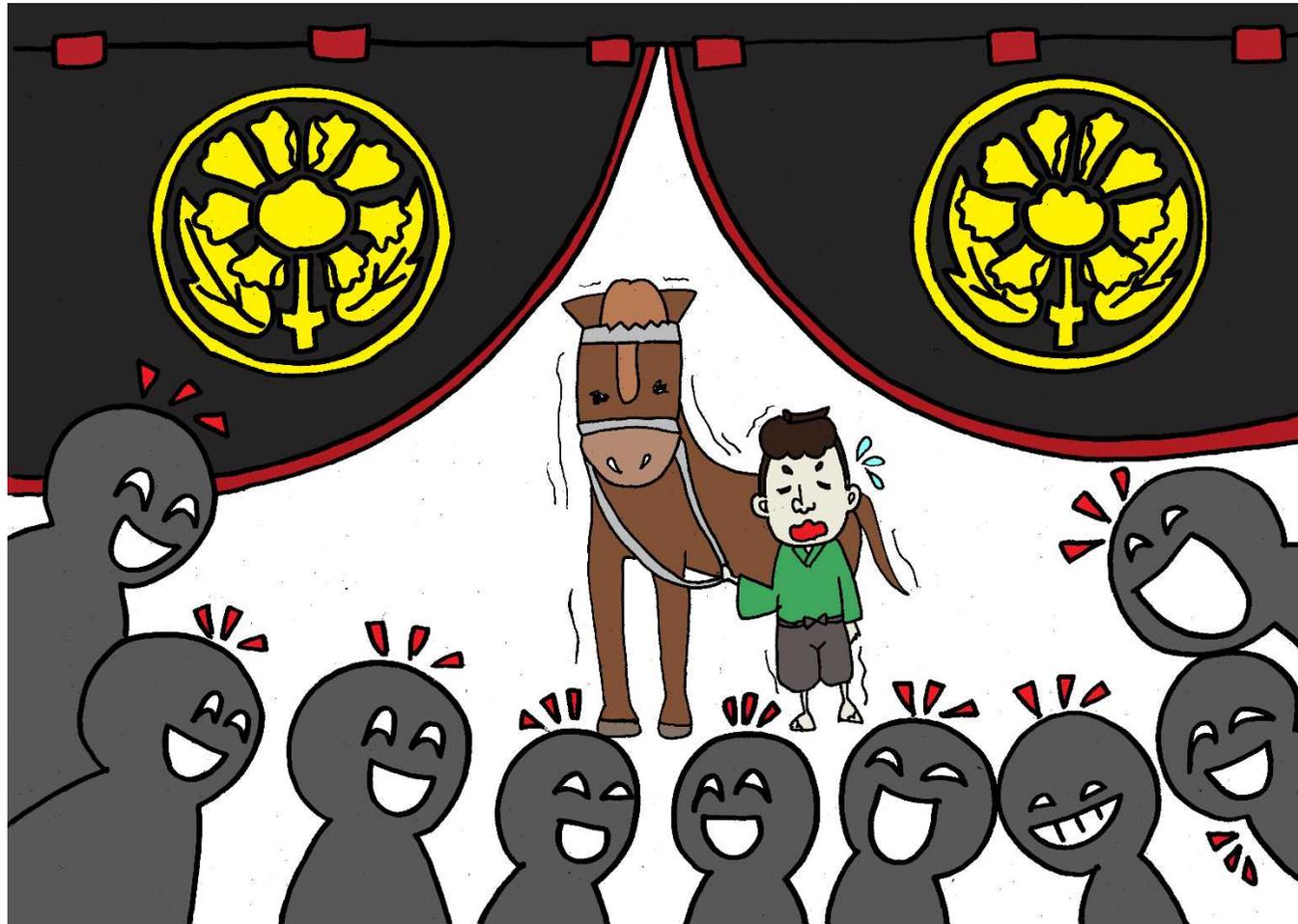


右馬介が江戸についた日の夜、津軽屋敷の一室で眠っていると、夢に赤倉様が現れて『わしは津軽の赤倉山に住む神である。わしの言うとおりにやれば、何も心配をする事はない』と言いました。それから『馬に乗ったらまず目をつぶれ。そして、馬が青竹に足をかけたら目をあけてみる。わしは目印に金の御幣を出しておくから、それから目を離すな。その通りにやると成功間違いなしじゃ。ゆめゆめ疑うなかれ』と言うと、スッと姿が消え、夢が覚めました。

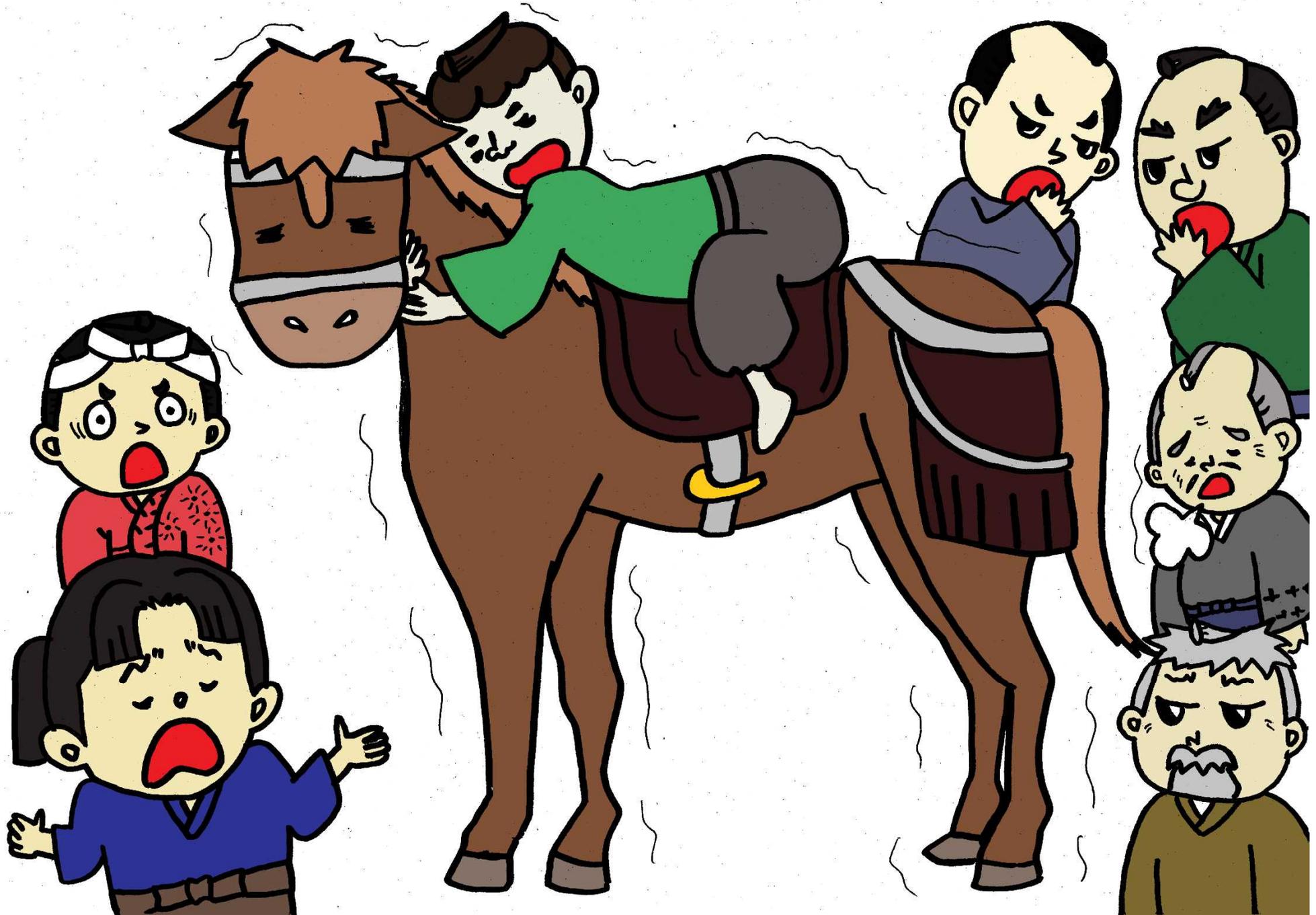


さあ、いよいよ今日は、将軍様の馬術大会の日です。
津軽の殿様は、どんな名人を連れてくるのだろうと、将軍様も大名、家来たちも興味津々で座っていました。
見物客も山のように集まっていました。

津軽公の順番になりました。
太鼓がドーンドーンとなり、牡丹の紋が入ったあん幕が上がると、そこに現れた侍は、背丈が低くて、ぼんやりとした男で、おまけにブルブルとふるえていました。
馬もヨタヨタとした歩き方の年寄りの馬で、おまけに脚が悪いのか、ガクガクと歩く痩せた弱々しい馬でした。



右馬介は鞍にしがみついて、ようやくやせ馬の背中に上りました。
見ている人達は、そのまぬけな騎手と馬を見比べて、あまりにも面白くて、どっと笑いました。



ところが、その馬が青竹に一步脚をかけると、急にシャキツとなって、元気になり『はいよう』という騎手の号令に合わせて、スタスタと歩き始めました。

その時、騎手の右馬介の目に、赤倉様の神様のお告げのとおり、金の御幣があざやかに見えてきて、パカッパカと歩く脚先にも力が入って、青竹を半分渡り、その場でくるっとまわれ右をして、無事に戻ってきました。



見ていた人たちは、あまりの事に信じられなくて、開いた口がふさがりませんでした。
そして、『ウォー』というため息と叫び声が上がり、大喝采になりました。

将軍様も、『これは見事な業じゃ。あっぱれ、あっぱれ』
とほめました。



ひげ殿様は、内心ハラハラして、胸がドキドキしましたが『よくやった。でかした。でかした。』と右馬介をほめてから、くるりと將軍様の方を向いて『津軽にはこのような馬乗りは何人もおります』と言いました。

なんて、みえつぱりな殿様だったんだろうなあ。

おしまい

